

# スポーツ文化の視点と 生活者の「からだ」

菊 幸一 (きく・こういち)

筑波大学大学院教授。1957年生まれ。専門はスポーツ社会学。1987年筑波大学大学院博士課程体育科学研究科単位取得退学。教育学博士。日本スポーツ社会学会前理事長。主な著書は、『スポーツ政策論』（共編著、成文堂）、「からだ」の社会学』（共編著、世界思想社）など。

## スポーツをする「からだ」の不思議

考えてみると、人間の「からだ」というのは、実に不思議な、不可解な存在である。普段、私たちは五体満足な「からだ」の機能を駆使して、精一杯の利便性を求め、生活に支障のない「からだ」の動きを通して、自由を満喫している。もちろん、肢体に不自由のある人が、その動きの制限から生活を満喫する自由が奪われているということを言いたいのではない。「からだ」に何らかの不自由がある人も、その状態から自らの「からだ」の機能を向上させるためにあらゆる努力を続けながら、環境に適応した（あるいは適応させた）「からだ」の自由を拡大させていく。

しかし、そのような生活と「からだ」との関係、すなわち普段の生活では「からだ」の機能を全開させて、生活の利便性を向上させ、あるいはその機能を機械に代行させることまでしながら自由な運動を拡大していこうとすることが当たり前に行われていることに比べると、スポーツをする「からだ」ほど、摩訶不思議なものはない。なぜなら、例えばサッカーでは、人間の「からだ」に比べてもっともその自由を拡大し、利便性を高める手・腕を使用してはならないことになっているからだ。このサッカーに限らず、およそ現代のスポーツにおいて、人間の「からだ」の自由奔放なエネルギーの



発揮(それが高ければ「暴力」  
となるエネルギー発揮の暴  
走)をコントロールするルー  
ルを持たないスポーツは、も  
や今日「スポーツ」とは呼ば  
れない。

先のサッカーの話に戻ろ  
う。一般生活において他の誰  
かから、理不尽にルールとし  
て「手・腕を使つてはならな  
い」と言われたら、人びとは  
たちまちのうちにその不自  
由な状態に我慢ならなくな  
り、ルールを破っていくこと

あろう。しかし、サッカーをする人びとの「からだ」は誰も不平・  
不満を表すこともなく、むしろ喜々としてそのルールに従い、その  
動きを機械に代行させないで、自ら汗を流しながらこれを楽しま  
うとする。むしろ、普段の生活ではルールを守ろうとしない子ども  
たちが、積極的にサッカーのルールを守り、わざと不自由な「か  
らだ」をつくって遊ぶのである。いったい、サッカーをする「からだ」  
に何が起こったのであろうか。

ここでは、どちらも同じ「からだ」でありながら、生活のために  
手段化される「からだ」と、遊ぶことを自ら求めようとする目的  
としての「からだ」に大きな意味の違いがあることに気づかせられ

る。それは、スポーツをする「からだ」が他の目的の道具となつてし  
まうような他律・手段的なものなのか、それともこの「からだ」を  
動かすこと自体に楽しさや喜びを見出そうとするような自律・  
目的的なものなのかの違いによるのである。この違いは、スポーツを  
する「からだ」が生活者にとって文化としてとらえられたとき、初  
めて人間にとって愛おしい存在として意味や価値が付与されると  
いう、スポーツ文化の視点の重要性に気づかせてくれる大きなヒン  
トとなつている。

## 「からだ」のエネルギーのコントロールと 近代スポーツの誕生

そもそも「サッカーという文化」とは何かを、その歴史から振  
り返つてみよう。その原型は、イギリスにおける中世庶民のモブ・  
フットボールにあると言われている。このフットボールの形式は、現  
在のサッカーとは異なり、かなり荒々しく、暴力的なゲームであつ  
た。すなわち、それは村対抗、町対抗で競われる群衆フットボール  
であり、豚や牛の膀胱でつくられたボールを数百人の人びとが入  
り乱れて奪い合うスポーツで、殴る、蹴る、取っ組み合うのが当た  
り前のケガ人続出(死者が出ることも珍しくないほど)のゲームで  
あつたという(図1)。

このような暴力的なスポーツであるサッカーを、一転して現在の

ような禁欲的で、非暴力的なゲーム形式に変えたのが19世紀におけるイギリスの私学エリート校「パブリックスクール」であったと言われている。そこでは当初、先生の手におえない乱暴な生徒たちが、「からだ」のエネルギーを暴走させるままに暴力的で荒々しいモブ・フットボールに興じていた。これを生徒たち自身によって自治的にコントロールさせ、楽しさを継続する時間をなるべく長くするルール（＝拘束）を設定するよう提案したのが、ラグビー校の校長であったトマス・アーノルドであった。寮対抗から複数の寮による総当たり戦へゲーム形式を変えることで、彼ら生徒たちは安全にゲームを行い、それをなるべく継続することによって楽しい時間を延長すること、それが結果的に

は「からだ」のエネルギーを自他の「安全な」そして「楽しくなる」からだのためにコントロールするという、意図せざる結果を招くことになったのである。これこそが、アスレティズム(Athleticism スポーツ礼賛)というイギリス独自のスポーツを通じたジェントルマン(紳士)教育思想を生み出し、社会的エリートを育てるスポーツ教育として成立していく要因となったのである。

しかし、このこと以前に、近代イギリス社会は18～19世紀にかけて起こった産業革命＝エネルギー革命によって、人



【図1】「からだ」のエネルギーが暴走するモブ・フットボール  
(出所)Martin Tyler: The Story of Football, M.Cavendish, 1976

力や家畜に頼らない蒸気エネルギーのパワーをいかに合理的に効率よくコントロールするのが社会的課題になっていた。すなわち、エネルギー量それ自体の価値より、このエネルギーをその目的に応じたどのようにコントロールして発揮するのか、すなわちその「技術」の開発に価値がおかれるように変化していったのである。その意味で、これまではどちらかと言えば、エネルギーの発露の原点であった人間の肉体的パワーは、多少それが暴走（＝暴力化）しても社会的に許容されることが多かった（だから、モブ・フットボールも許されたのだ）。

しかし、近代社会は、このエネルギーをコントロールすることに価値をおくことから、かつて暴力的であったスポーツも次第にその目的に応じて「からだ」のパワーをコントロールする技術(技能)を持つことに価値がおかれるようになった。その(意図せざる)結果として、スポーツはたとえそこに暴力的な内容を伴っていたとしても、そのエネルギーをコントロールする非暴力的性格を求めることによって近代以降の社会に受容され、「からだ」それ自体の喜びや楽しさを享受することができる、安全で安心な身体運動文化としてのスポーツに変質していったのである。そして、これを近

代イギリスのエリート教育の一環として開発し、取り入れていったのがパブリックスクールにおけるスポーツ教育であったのだ。

これこそが、非暴力的であることはもちろんのこと、健やかで伸び伸びとした「からだ」によるパワー発揮の近代的原型(方法)であり、その生成のためには横溢する「からだ」のエネルギーを自ら解放する(追求する)とともにコントロールするという、二律背反的な事象を統合する文化として、今日のスポーツが成立したということを知っておかなければならない。

## スポーツ文化から遠ざけられる 生活者の「からだ」とその復権

ところが、近代化が遅れたわが国の教育において、子どもたちの「からだ」は、まずもって知育・徳育・体育という三育思想における体育としてのそれであり、ここでは統一した「国民」であることを自覚させるもとも手っ取り早い「上からの」コミュニケーションツールとして、生活者の「からだ」が位置づけられることになった。だから、「からだ」は最初から命令され、指示される対象であり、その外形が命令や指示通りに動いているのかどうかを即座に評価し、確認することができる(できやすい)他者のまなざしを意識した規律訓練の対象であった。また、運動する「からだ」は結果として国家の軍事力や労働力に役立つものでなければならず、それは

単純な量的指標によって外から評価されやすく、比較可能な対象でもあった。すなわち、我が国では、近代国民国家「日本」を形成する重要な手段として、その当初から「からだ」が他の目的に役立つそれとして道具化され、手段化されていたことになる。

そのような「からだ」観は、本来自由な「からだ」の動きを奨励するはずのスポーツにも適用され、いち早く野球や陸上競技、漕艇など外来スポーツを取り入れたエリート校(明治時代の第一高等学校や第三高等学校など)では、その社会的正当化のためにエリート精神を獲得する手段としてスポーツをする「からだ」を評価し、その修養・鍛錬性を重視した。つまり、とくにここではスポーツをする「からだ」の文化的な楽しさは隠蔽され、その健全性は他者に従属する身体的成果(従順な身体)の程度を通じて従順な精神の成果として測られたのである。スポーツ競技大会の勝敗の結果は、そのような成果の現れとしてもとらえられ、「我慢するからだ」や「苦しむからだ」がスポーツの勝利を導く「からだ」として神話化され、ますますそれを奨励することになった。

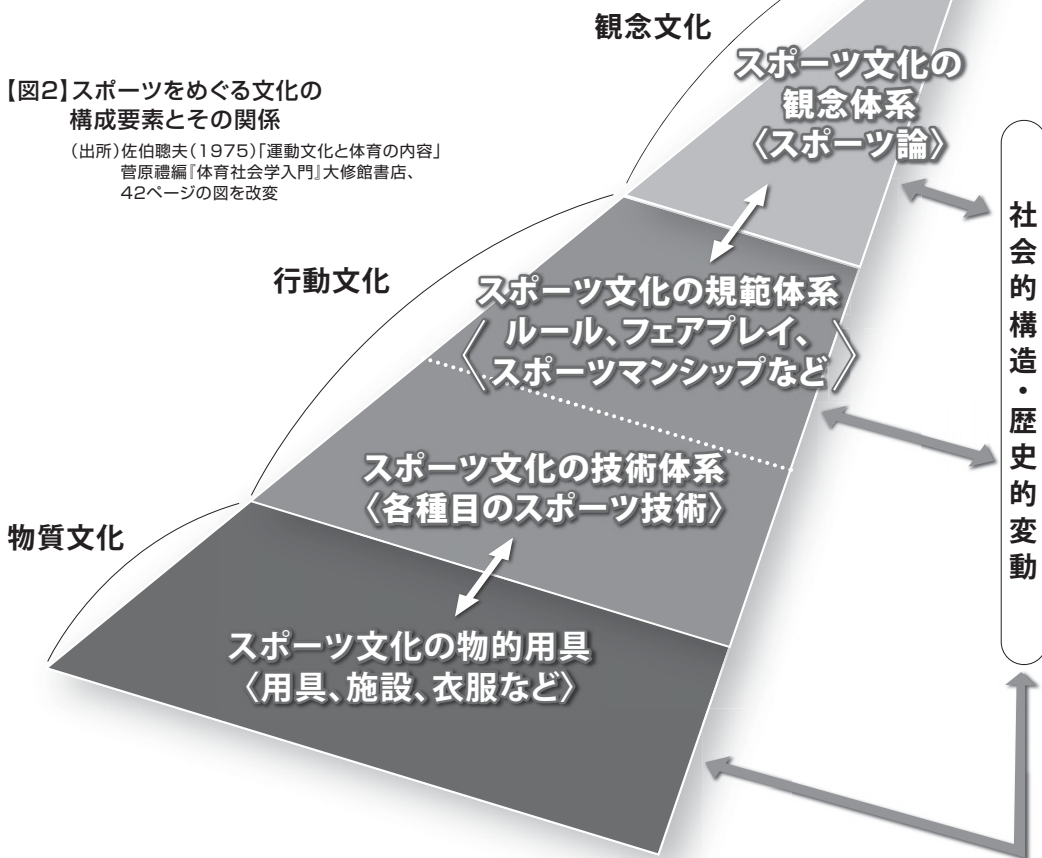
しかし、そのような「からだ」に対する統制や禁欲を新たな解放へと逆転させて「からだ」の喜びをつくり出す時間空間が、単なる「からだ」による運動ではなく、プレイ(遊び)としてのスポーツであった(あるいはスポーツでしかなかった)ことに注目しなければならぬ。そこで初めて、近代社会が求める「健やかなからだ」のあり様が認められたスポーツは、その文化的特性が尊重され、今日に至るまで継続しているということなのである。例えば、100m走をいかに速く走るのかを競い合うヒトの「からだ」は、動物であるチー

タの「からだ」には到底かなわない。しかし、人間は100mという距離を人間同士で競い合う行為に文化的な意味を与え、スタート・走路・ゴールを決めて(行動文化としてのルール化と物質文化の支え)、そのルールを自ら守ることによって、走ることを通じた競い合いⅡ走り合うこと、に大きな文化的価値Ⅱ「走るからだ」自体に楽しさや喜びを見出すのである。人間にとっての「健やかなからだ」とは、速く走ることそれ自体にあるというよりは、むしろそれがどのような文化的目的(観念文化)に導かれたスポーツをする「からだ」なのかによって意味づけられ、価値づけられていると言えよう(図2)。

ところが、今日、文化的価値として認められた運動としての「からだ」Ⅱスポーツは、もはや発育発達期である青少年期というひとつのライフステージのみに対応する教育的価値をはるかに超えて、すべてのライフステージ(生涯)にわたって社会的に受容され、大衆化されている現状にある。そうになると、スポーツは逆に、大衆(不特定多数)の欲望をストレートに反映してその潜在的な暴力性を扇動させられたり、外部から禁欲的圧力を過剰にかけられたりする対象に逆戻りしてしまう傾向をもつようにもなる。そのような大衆の欲望を煽るのは、文化的価値としてスポーツを尊重する理念を持たない経済、政治、メディアといった権力性を持った他領域(界)からの圧力と手段化である。ここでは、文化としてのスポーツによって育まれた「健やかなからだ」を生活者の視点からどのように守り、育てていくのかに関する現代的課題が突きつけられていることになるのだ。それは、スポーツという文化が利用さ

【図2】スポーツをめぐる文化の構成要素とその関係

(出所)佐伯聡夫(1975)「運動文化と体育の内容」  
菅原禮編『体育社会学入門』大修館書店、  
42ページの図を改変



れ、手段化されやすい価値を持つがゆえに、その自律性と自立性を有する生活者の「からだ」が身体的幸福(Physical happiness)の文化的享受をどのように実現しているのかが問われる所以でもある。

## 生涯スポーツからみた健やかな生活者の

### 「からだ」と生活の質(QOL)

それでは、生活者からみた「健やかなからだ」とは何か。生活の質(QOL: Quality of Life)とスポーツ文化とはどのように関連するのだろうか。生涯にわたる「健やかなからだ」

をスポーツの文化的価値とクロスさせてとらえたとき、すなわち生涯スポーツからみて、健やかな生活者の「からだ」をどのようにとらえることができるのかということである。生涯スポーツと「健やかなからだ」との関係を楽観的にとらえてしまうと、スポーツを生涯にわたって実践すること⇨健康⇨「健やかなからだ」というコンテキストが生まれ、ここでは生涯スポーツと「健やかなからだ」の育成との関係をめぐって何の問題も生じる余地がないことになろう。

しかし、人間の「からだ」は動物としてのヒトの「からだ」以外の何ものでもないわけであるから、言うまでもなく誕生から青少年期までを除けば、どこまでも「成長していくからだ」では

なく、「衰えていくからだ」、あるいは「死に向かつていくからだ」だと言つてよいわけで、むしろそのような状態で推移していく「からだ」と付き合う期間の方がはるかに長い。だから、ここでいう「健やかな



という価値基準を、従来の、一方的なプラスを志向する(青少年期における若々しい、あるいは元気な)「からだ」として措定し、イメージしてしまうと、「衰えていくからだ」は多少無理をしてでも過剰にその方向に従おうとすることになるだろう。この「衰えていくからだ」と、偏った生涯スポーツ観に支えられた、いつまでも元気で若々しい「幻想としてのからだ」とのギャップは、思わぬところで「からだ」自体を死に追いやることさえありえるのだ。「健康のためであれば、死んでもいい」というパラドックス、

すなわち脅迫された「健やかなからだ」は、むしろその目的や意味とは逆の結果を生み出す可能性のあることに十分留意しておかなければならない。

つまり、人間の人生にとつての「からだ」の健やかさとは、成長することや衰えることを「からだ」の「自然」としてそのまま受け入れることから始まって、「いま、ここ」にある「からだ」を人間の生の充実に向けて幅広い観点から文化的に解釈し、その望ましさを高めていくことで実現していくものと考えるべきであろう。そこには、たとえ病気や「からだ」の障害があったとしても、人間的生の充実(QOL)をめざしてそのような今、ここにある「からだ」と常に肯定的に向き合い、真摯に、そして素直に「からだ」の楽しさや喜びに

浸ろうとする広義の文化的行動⇨スポーツ、の世界への可能性が拓かれている。人間は、「からだ」を通して健やかさを獲得するので

はなく、「からだ」からしかそれを学べないのであり、自己目的な楽しさを追求する「からだ」のエネルギーの可能性(人間的生の充実を可能にする「からだ」と結びつく社会的・文化的環境を整えること)でしか、これを実現していく術がないのである。また、この人間の「からだ」は自然そのものであるから、そのエネルギーの発揮の仕方やコントロールは自然環境全般や他者の自然としての「からだ」と調和し、共生する方向をめざすことでは生かされないことになる。QOLを文化的に享受する「からだ」は、決して自然の理(しりわけ)から逸脱したり、暴走したりすることはないのである。

サッカーをする「からだ」に代表されるように、スポーツの文化的行為とは、ときには自然を破壊してまで日常生活のなかの「からだ」の利便性を追求することをわざわざやめて、むしろ「不自由なからだ」「困難なからだ」を想定することにその出発点があった。そしてこの行為は、自ら今できる力をコントロールしながらこれを効率よく発揮して、その目標を克服したり、達成したりする自己目的な楽しさを追求する過程そのものである。だから、それはこれまでのように上昇する生活者の「からだ」にとって役立つから行うというスポーツ文化の教育的(体育的)視点からではなく、スポーツが近代文化として成立した文化的視点に立ち返って、実際に下降していく生活者の「からだ」にとっての文化的視点からこそ、(衰える「からだ」の面倒くささを乗り越える)その意味や価値のある楽しさを享受する可能性に拓かれていることになると考えられる。

したがって、人生80年時代を迎えた現在の生活者(大人たち)の責任はきわめて重いかもしれない。なぜなら、「健やかなからだ」や

QOLを文字通り体现する「からだ」をめぐる彼らが指し示す思想としての文化的環境と実践(すなわち、スポーツ環境とスポーツ行動)との関係は、次代の生活者(子どもたち)の生涯スポーツモデルとなっていくであろうから。そこでは、「健やかなからだ」が、病気なのか、病気でないのか、から判断されるのではなく、どのような状態の「からだ」であつても文化的活動としてスポーツする楽しさや喜びを享受できる自己目的的活動のモデルが示されるであろう。そして、加齢による体力の衰えは、むしろこれまでのスポーツ経験の蓄積に加えて、現在の新たな体力状態にフィットしたさらに多くの身体運動経験の可能性に拓かれているという意味で、多様なスポーツ環境とスポーツ行動を実現するチャンスととらえられるだろう。スポーツ(エネルギー)の持つ多様な魅力とは、これまで述べてきた近代スポーツの文化論的視点からみたスポーツをする「からだ」が発揮する自在なエネルギーのコントロールによって拓かれることから、人間の一生涯にわたる魅力として享受されていくと考えられる。

このような生涯を通じた「健やかなからだ」をめぐる文化的価値を体现するスポーツ文化のパラダイム・チェンジは、スポーツを通して生活全般にわたるQOLの向上にも寄与することが望まれる。その原点は、サッカーをする「からだ」の不思議<sup>CEL</sup>スポーツ文化の視点、にこそあると考えられるのだから。

(付記)本稿は、拙稿(2007)「運動・スポーツの文化的価値と「からだ」中等教育資料、56(7)・20-25を新たなアイディアに基づいて大幅に修正・加筆したものである。